

音 楽 科

大 滝 菜保美
笹 谷 真理子
乗 富 章 子

1 音楽科における聞き合いの活動

音楽的スキーマ

音楽を表現・鑑賞するために必要となる経験と能力

音楽性

音楽を理解し、そのおもしろさや美しさを感じ取ったり表現したりすること

音楽科における「聞き合い」の活動とは、音や音楽を媒体として子どもが他とかかわりながらよりよい音楽表現を目指す姿である。

子どもは、音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何らかの感想を抱く。表現活動においては、その感想を聞き合うことで、自分や自分たちの表現に生かすことができるか考え、試み、新しい音楽表現に迫る。また、その音楽表現をもとに感想や意見を聞き合い、試行錯誤することで、よりよい音楽表現に近づくことができると考える。鑑賞活動においては、音楽を聞いた感想をもとに互いの感じ方やイメージを聞き合い、音楽を特徴付けている要素と結びつけたり、多様な感じ方を理解したりすることで考えを深めていくことができる。このような聞き合いの活動を繰り返すことで、よりよい音楽表現に近づき、個々の感性や技術が高まり、音楽科のねらいである「音楽性を培う」ことになる。

また、子どもが音や音楽そのものの美しさや楽しさを分かち合ったり、共に思いや意図をもって表現したりする楽しさや喜びも大切にしたい。したがって、音楽科における聞き合いの活動を以下のように考える。

様々な音や音楽に 自分なりの感じ方で向き合いながら
互いにかかわり 自らの音楽性を高めていく活動

2 聞き合いのステージと活動

音楽科における聞き合いの活動では、三つのステージを、各々の感じ方を表出し共有する D ステージ、音や音楽にどのように向き合うことで表現するかを考える T ステージ、よりよい表現へと高めるための工夫をする U ステージと捉える。これが絡み合い機能することで、授業における個々の音楽性が高められると考える。

(1) D（である）ステージ～個々の感じ方を表出し、共有するための聞き合い～

音や音楽、楽器との出会いを経て子どもは、個々に様々な表現に対するイメージをもつ。そのイメージを聞き合い、共有する場である。子どもの感じ取り方も様々で個人差があり、それを互いに表出することで、いろいろな感性にであることができる。例えば、「楽しい感じ」「弾むような感じ」などの感想を交流することで共感したり、違いを感じたりして、よりよい表現に生かすことができる有効な情報として共有される。

(2) T（つながる）ステージ～目標に近づくための聞き合い～

目標の明確化

目標を明確化し、何をどのように向上させれば、目標に近づくことができるのかを自覚する。この「何をどのように向上させればよいのか」を考える段階で、互いの考えや表現を聞き合い、よりよい表現をしようと試行錯誤させれば音楽的な深まりを促すことができる。

(3) U（うまれる）ステージ～よりよい表現にするための聞き合い～

過程の繰り返し

U ステージの聞き合いの活動とは、表現されたものを聴いて、聴き手が表現側に感じたことや改善点を伝え、さらに表現を工夫させる。そうして高まってきた感性や技能を用い、音楽的な要素をもって自在に表出（音楽表現および聴き取り）する場である。この過程を繰り返すことで表現がよりよいものへと変化し、これらの活動を通して習得した表現方法は、次の楽曲に出会ったときにも生かされる。また、子どもは、具体的な例（音や音楽を媒体としたもの）に触れながら音楽性を高めていくことができる。

3 聞き合いの活動のための手だて

2で述べた三つのステージにおいて以下の五つの手だてを講じ、聞き合いの活動に迫る。

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

音楽を形づくっている要素

「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」などを含むあらゆる要素

場の設定

思いを具体化する

子どもは、楽曲に初めて出会ったとき、個々に様々な感じ方をする。それらは、漠然とした印象、生活経験や既習にもとづく反応、音楽を形づくっている要素が絡み合った感受などである。それらを子どもなりに言語化して、友だちや教師に伝えようとする。しかし、それらを子どもなりの音楽表現として表出させるためには、感じ方が共有できる場を設定する必要がある。

例えば、ある楽曲を聴いて「ねこが踊っているみたい。」と述べた子どもの発言は、拍子をとらえたからなのか、踊りと思うような歌詞を見つけたからなのか、楽器の音色からなのかと、要素を促すことで他と共有できる。

また、音楽を形づくっている要素に着目させることで、次の表現に向かう手がかりをつかむことができる。リコーダーで「きれいに流れるような感じで演奏したい。」と願う子どもには、聞き合いの活動において、レガート奏やフレージング、タンギングの強弱などに気付かせることにより、イメージを具体的な演奏方法として伝えることができるのである。

(2) 学習の過程を自覚させる

課題

ここでいう学習の過程とは、子どもが自分の学習してきたことを自分で理解し、今自分にとって何が必要か分かり、それを会得することによって自分で決めた到着目標に近づくことができると分かる一連の活動である。

音楽科の学習において、教師が課題を提示してそれに従って学習を進める方法より、子どもが自ら課題を見つけて取り組み、聞き合うことによって課題を解決していく方法が、子どもの主体性を育むうえで大切であると考え。そこで、子どもに、今自分がどこまでできていて、これからどんなことをどのように解決していくことが大切かを自覚できるように明示する。

(3) 音や音楽を聴き比べる

音や音楽を媒体とする聞き合い

比較する

音楽科の学習において、言葉だけによる聞き合いは成立しない。常に音や音楽を媒体とした聞き合いが前提である。その時には、表現を聴き比べて楽器や声の特徴、その共通点や相違点などを見つけ出すことで、次の表現に向けて留意すべきことが明確になる。表現だけでなく鑑賞の領域でも、「聴き比べる」ことでそれぞれのよさや特徴が明確になる。特徴を明確にし、次の活動へつなげるために聞き合いの活動が活性化することが期待できる。

(4) テキストを活用する

音楽科のテキスト

音楽科のテキストとは、楽譜、絵譜などのオリジナル譜、範唱範奏 CD、子どもの演奏そのものなどを指す。これらのテキストを必要に応じて活用し、聞き合いの活動に生かしていく。

楽曲との出会いの場で、範奏を聴く、楽譜を見て音を確かめるなどでテキストを利用する。次に、演奏するために自分たちが必要なことがらを書き込んでいく、友だちからのアドバイスも書き込む、オリジナルの絵譜などで自分たちだけに分かるように書き加える、などがテキストの活用と言える。

この方法は、一瞬にして消えていく音楽の表現を可視化し、共有し、再生し、向上させるために大切な手だてであり、聞き合いの活動を活発に機能させる手だてである。

4 実践例

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

① 2年生の実践

「かくれんぼ」(Dステージ Uステージ)

4月からの実践で、子どもが音や音楽を聞いた時のイメージを聞き合い、共有するために、一人一人が感じたことを発言する場を設定してきた。安心して発言できる雰囲気を大切にしたいと考え、どんな発言も認めるようにした。発言は板書して、視覚的な情報に置き換えた。板書することで、前の友だちの発言につなげて自分の思いを発言する姿が見られるようになってきた。音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みに結びつけて考える場を持つために、感じ取ったことから「なぜそのような感じがしたのか。」と理由を尋ねた。

「かくれんぼ」の歌唱では「楽しそう。」「はりきっているよう。」「はずんだ感じがする。」という子どもの感想から「どうしてそんなふう聞こえるのかな?」と投げかけた。符点のない八分音符のリズムと符点のついたリズムを聞き比べることによって、「とんでいるみたいだ。」「スキップしているみたいだ。」「タッタタッタと聞こえるよ。」と符点のリズムに

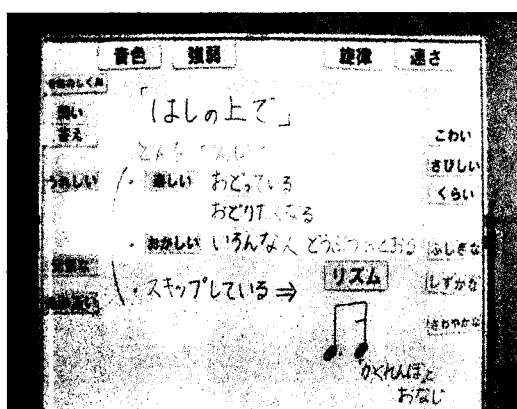


写真1 感じたことをリズムに結びつける

気付いた。その後、実際に全員でスキップをすることで、符点の持つ躍動感を意識しながら、はずんだ楽しい雰囲気で歌うことができた。符点のリズムは2拍子「はしの上で」のリズムと同じだと気づく子どもがいて、「はしの上で」の歌唱においても、軽快で楽しい感じで表現していた。子どもの感じた思いや考えから、音楽を特徴付けている要素「リズム」に結びつける場を持ち、互いの考えを聞き合うことで、より豊かな表現につなげることができた(写真1)。

「かくれんぼ」の歌詞は「もういいかい」「まあだよ」の2回の繰り返し(反復)と「もういいかい」

「もういいよ」という鬼と隠れる側の会話の形(問いと答え)になっている。音楽の仕組みである「問い」と「答え」の楽しさや、「反復」の持つおもしろさを意識させるために、教師が「もういいかい」「もういいよ」の1回で歌を終わらせ、「反復」も同じ大ききさで歌って聞かせた。すると、「1回で終わるのは、かくれんぼらしくない。」「声の大きさはかわってくる。」と音楽を形づくっている要素に気付く発言があった。「問い」と「答え」や「反復」のよさが聞き合いによって明確になった。

グループで、実際にかくれんぼするときのことを思い出し、鬼の気持ちや隠れる側の気持ちになって「強弱」の工夫をさせた。「最初のじゃんけんのところはやる気まんまんで元気な感じだから強く歌いました。」「楽しそうな感じが伝わってきました。」「最後の『もういいかい』はかくれる人が遠くにいても聞こえるように強く歌った方がいいと思います。」「鬼はだんだん心配になってくるから小さくしました。」「最後の『もういいよ』を強い声で歌うと見つかってしまうから、弱い声で歌う方がいいね。」と、それぞれのグループの工夫やアドバイスを聞き合い、本当にかくれんぼをしているような雰囲気の楽しさやよさ、面白さを共有することができた。

② 5年生の実践

合唱曲「世界がひとつになるまで」(Dステージ)

子どもは、合唱練習に入ると音程をとることのみに一生懸命になりがちである。正しく音程をとれば歌えると思っている子どもが多い。

「世界がひとつになるまで」はどんなイメージで歌いたいかを尋ねた。「きれいに。」や「元気に。」「楽しく。」という意見が多かった。中には、「歌う場所によって歌いたい感じが違う。」という意見もあった。

そこで、具体的にイメージするために音楽を特徴付けている要素に着目させる場を設けた。きれいな感じとは、具体的にはどのように歌うことかと尋ねると「強弱」や「レガート」、「歌う姿勢」や「口の開け方」、「音程」などがあげられた。話し合いの結果、歌う姿勢や音程をとることは個人差があることから、全員で共有できるのは「強弱」であるという意見にしばられた。全員の意見を聞きながら、強弱を意識できるように楽譜に強弱記号を書き込むことにした。すると「フォルテのところは、楽譜に記されている音符が高い音になっている。」や「題名と同じ歌詞のところは曲の山になっている。」といった曲の特徴の気付きがあった。実際に、強弱をつけないで歌った時と強弱をつけて歌った時を比べると、強弱をつけて歌った時のほうが、「歌っていて楽しい。」「きれいに聞こえる。」「自然に大きく歌いたくなる。」などの感想があった。

曲のイメージやどのように歌いたいのかという思いを出し合い、音楽を特徴付けている要素に結び付けて考えるための聞き合いの活動をもつことで、「曲の山」「強弱」「歌詞」を意識して歌うことが共有でき、より楽しくきれいに歌えることが実感できた。

(2) 学習の過程を自覚させる

① 2年生の実践

「拍のまとまりをかんじとろう」(Tステージ)

拍子の違いを感じ取らせるために2拍子と3拍子の「ぶんぶんぶん」を聞き、曲に合わせて動く活動を取り入れた(写真2)。その後、感じたことを発表させた。同じ曲の2拍子と3拍子の演奏を聞き比べることで、「同じ曲なのに何か感じがちがうぞ。」「何がちがうのだろう。」という子どもの思いから、課題である2拍子と3拍子のちがいについて意識させることができた。



写真2 動きで違いを感じる

② 5年生の実践

リコーダー二重奏「見上げてごらん夜の星を」(Tステージ)

本教材は、一人で演奏するだけではなく、二重奏曲としてペアで合わせることでお互いのかかわりが持てると考え選曲した。

まず、自分たちの練習の見通しをもつために発表の日に向けて、それぞれのペアでその日の課題を考える場を設定した。

あるペアは、楽譜に強弱を書き込み曲の山の部分を話し合っ確認し、上下のパートを合わせる練習に入った。合わせてみると、二人の演奏が途中から合わなくなった。このペアの課題は、「合わない原因はなぜだろう。」である。原因を探るため、お互いの演奏を何度も聞き合った結果、ずれてしまう原因は、ペアの一人が3拍分伸ばすところを2拍分しか伸ばしていなかったことだった。一つの課題が解決し、次の課題である聞き合いの活動に進むことができた。「速さ」「ハーモニー」「曲の山」を意識して演奏することである。

また他には、「レガートに演奏するためにブレスの位置を確認し、タンギングを工夫する」ペア、「上パートと下パートの音量をチェックし合う」ペア、「テンポの違う演奏を聞き比べて『ゆっくり演奏したほうがこの曲にあうよ。』と考えを見つける」ペアが見られた。ほとんどのペアが、自分たちで課題を見つけ練習や工夫をすることができた。この実践では、二人で演奏しなければならない必要性から、かかわりができたことや自分たちの演奏

を比較したり要素に結び付けたりすることで課題が明確になり学習の過程を自覚することができた。練習の見直しをもち、その日の課題を自分たちで見つけ試したり、試した中から課題を見つけたりを繰り返すことで、何をどうすればよいのか次第に具体的になり、学習に取り組むことができた。

(3) 音や音楽を聴き比べる

① 2年生の実践

「かえるのがっしょう」(Dステージ)

子どもの出す音や音色、リズムは個々に様々である。いろいろな感性に出会い、自分の表現を見直したり、試したりして自分の表現に生かしていくことが音楽における大切な聞き合いとなる。そこで、授業の初めには様々な音楽遊びをとり入れ、友だちの出す音、音色、リズムを聞き合う活動を進めてきた。例えば、「おはよう」を4拍の中でさまざまなリズムに変え、リレーでつなげていった「おはようリレー」、自分の好きな食べ物、色、キャラクターなどを4拍のリズムにして、それをみんなでまねる「まねっこリズム」、教師の歌うドレミをまねして歌ったり、鍵盤ハーモニカで演奏したりする「まねっこドレミ」である。これらを通して、子どもたちは音やリズムで自分の思いを伝えていた。活動を楽しみながら、友だちの表現する音やリズムに関心を持って聞き、友だちの工夫した表現を自分の表現に生かす姿も見られるようになった。

このような日々の実践の上で「かえるのがっしょう」では鍵盤ハーモニカの輪奏を行った。ねらいの一つは、旋律が重なり合う響きを楽しむことである。クラスを二つに分けることで楽しむこともできるが、よりきれいな響きを感じ取るために、さらに人数の少ないブロックごと、班ごとに演奏するなど少人数での演奏形態を取り入れた。互いの音をしっかりと聞く活動を取り入れていくことで「音が切れている人とつなげている人がいるから、そろえた方がいい」と次の課題を見出す聞き合いができた。



写真3 拍子に合ったペアでの身振り



写真4 音を媒体とする聞き合い

② 2年生の実践

「拍のまとまりをかんじとろう」(Dステージ)

2拍子「はしの上で」3拍子「たぬきのたいこ」の楽曲に合わせて身振りをしながら歌う活動を進めた。2拍子に合う身振り、3拍子に合う身振りを音楽に合わせて工夫していく。工夫した身振りをブロックごとに見合い、互いのよいところを聞き合った。よいところを自分たちの動きに取り入れることで、2拍子や3拍子により合った身振りが共有できた(写真3)。また、2拍子と3拍子の違いについて考えを話す場面では、演奏に合わせて違いを友だちに伝えようとする姿が見られた。「2拍子の方を弾いてください」と教師に要求し、2拍子の拍のまとまりを意識して、教師の演奏に合わせて手拍子を打っていた。言葉だけではなく音や手拍子を媒体とする聞き合いが見られた(写真4)。

③ 4年生の実践

リコーダー「オーラリー」(Uステージ)

リコーダーを3年生から始め、運指やタンギングに慣れた時期である。最初にオーラリー

一の範奏を聞いて、「メロディーがきれい。」「音がつながっている。」「音色がきれい。」などの感想を共有した。

次に個人練習の後、クラスの何人かが一人で演奏し、友だちからアドバイスをもらう場を設定した。すると、(資料1)のような具体的なアドバイスがあった。(資料1)を比較するポイントにまとめると、

- ・ひびき
- ・ブレス (位置, 瞬間に)
- ・フレーズ
- ・タンギング (強弱, サミングの時注意) の4つである。

- ・息を吹き込む量が少ないと音がひびかない
- ・タンギングは強すぎると音がつながらなく弱すぎると音がはっきりしない
- ・ブレスをすばやくしないと次の音が遅れる。ブレスの位置をたくさんいれるとフレーズがきれいでしまいきれいに聞こえない
- ・伸ばす音を最後まで聞きながら演奏しないとフレーズが切れてしまう
- ・サミングの音はタンギングに気を付けないとピーンとした耳に痛い音になる

互いにアドバイスをし合う場を設定したところ、「タンギングをはっきりしたほうがいい。」や「のばす音をしっかりとのばそう。」「旋律が切れないようにブレスの位置を考えよう。」など、具体的なアドバイスをし合うことができた。

資料1 子どものアドバイス

このように、互いの演奏を比較することで、次の課題に向かう視点を共有し、改善点を伝え合うことができた。音や音楽を比較することは、音楽科の聞き合いの活動では欠かせない手だてである。

④ 5年生の実践

合唱曲「世界がひとつになるまで」(Tステージ)

三人グループで、一人が旋律を歌い残る二人が聞いて、歌う姿勢や声のひびきなどチェックをする場を設定した。それぞれチェック表に、自分以外の人の歌う姿勢や声についてチェックする。チェック表は、資料2である。また、2回目は1回目と違う三人でグループになりチェックを行った。1回目のチェックでは、チェック表に書かれた項目に○×だけの記述が多かったが、2回目になると具体的な文で記述する子どもが増えた。また、項目を自分たちの必要に応じて増やす子どもがでてきた。増えた項目は、「視線」、「強弱」、「ブレス」、「頭声的発声」などである。

チェック項目に書かれていた主な内容は、「視線が下を向いているので少し上を向いたほうがよい。」「口の開け方が小さいので、ひびきがあまりなかった。」「ブレスが多くフレーズが切れていた。」などである。子どもはこれらのアドバイスを受けて課題とし、練習や工夫を重ねチェックを受けることを繰り返した。チェックを繰り返すことによりそれまで意識していなかったことを意識して歌うことができるようになった。資料2のA児、B児のように友だちの声を比較するという聞き合いの活動では、自分の声を客観的に見直すことにつながった。

	Aさん	Bさん
音程	ok	ok
リズム	ok	ok
速さ	ちょうどよい	ちょうどよい
しずい	ok	ok
口の大きさ	もう少し大きくても	もう少し大きくてもいい
ひびき	ok	ok
ブレス	ok	ok
強弱	もう少しつがる	もう少しつがる

資料2 チェック表

⑤ 5年生の実践

「双頭のわしの旗の下に」「アイネクライネナハトムジーク」の鑑賞（Dステージ）

吹奏楽と弦楽合奏それぞれの特徴をはっきりと示している2曲を聴き比べる活動である。曲の題名は伝えず「双頭のわしの旗の下に」を鑑賞して感想や気付いたことについて聞いた。すると、「運動会の入場で使われそう。」「元気がいい。」という感想が述べられた。続いて、「アイネクライネ…」を鑑賞させて「双頭のわしの…」の感想を聞くと、「ラッパの音がした。」「明るい曲。」「なめらかな部分が途中ででてくる。」「いさましい感じ。」「同じ旋律が何回かでてきた。」「行進曲みたい。」「太鼓の音がした。」「低い音がした。」「はげしい感じとやさしい感じが極端だった。」などたくさんの気づきや感想が述べられた。1曲だけを鑑賞させるより、2曲を鑑賞させ聴き比べたほうがあきらかに感想や気づきが多かった。

2曲を聴き比べてはっきり違いが出たのは、感想や気づきである。聴き比べることで吹奏楽と弦楽合奏の音色の特徴や違いがわかり、全員で共有することができた。以上のことから、2曲を聴き比べることで感想や気づきが多くなり、よりたくさんの感想を交流することができた。

(4) テキストを活用する

① 2年生の実践

「拍のまとまりを感じとろう」（Uステージ）

2拍子と3拍子の2つの絵譜を用意し、拍のまとまりや強迫・弱拍を目で見えるように表した。曲に合わせて感じ取った2拍子の「強・弱」3拍子の「強・弱・弱」の拍を「強」は大きな赤丸、「弱」は小さな青丸で表した。「2拍子は強弱がこんな風に聞こえました。」「3拍子は1だけが赤の丸です。」と自分の感じ取った拍のまとまりを絵譜を使って説明していた。視覚的に表すことで2拍子、3拍子の拍のまとまりをはっきり感じ取らせることができ拍の流れに乗って、リズム打ちをする時の一助となった。互いの考えや表現を共有するためにも、絵譜は有効な手だてであった（写真5）。

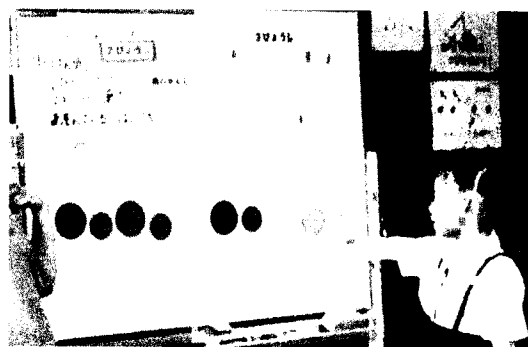
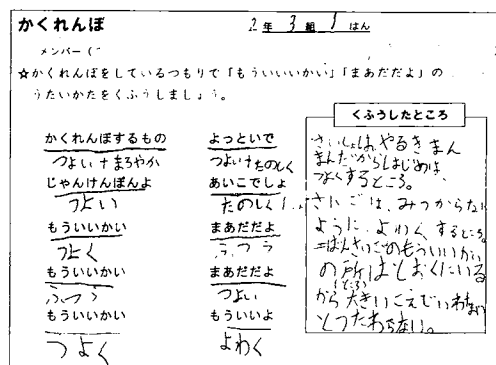


写真5 絵譜を使って説明

② 2年生の実践

「かくれんぼ」（Uステージ）

自分たちの表現の工夫を明確にし、思いや意図がよりはっきり伝わるようにワークシートを用意した。グループで話し合い、自分たちの工夫を書き込んでいく。発表の際にもワークシートを拡大したものを掲示し、表現の工夫が聞いている子どもたちに音楽と言語で伝わるようにした。形として残らない音楽表現を可視化することは、聞き合いの活動には大変有効であった（資料3）。



資料3 工夫を書き入れたワークシート

③ 4年生の実践

おはやしの旋律づくり（Uステージ）

2小節のおはやしの旋律づくりを行った。ミ・ソ・ラ・ド・レの5つの音を使った創作である。その後ペアになり2人の作品を合わせて4小節の作品にし、リコーダーで演奏する。2小節の作品をつくる時は、楽譜に書き込み、その楽譜をテキストとしてよりよい音

楽表現に作り上げていくことができる。二人の作品を合わせ演奏する時には、言葉や音だけでは、相手になかなか正確には伝わらない。テキストとしての楽譜があれば、より正確にリズム、旋律を伝えることができる。ペアになった時は、お互いの作ったおはやしを聞き合うことになる。あるペアでは、お互いに作ったおはやしや意見を聞き合った結果、1小節目の旋律に同じ音が使われて「民謡の特徴がでていない。」ということになった。そして、「同じ音を使うと特徴がでない。」ことに気づき何度も繰り返し作り直した。出来上がった作品は、民謡音階の特徴をとらえ、良くなっていた。テキストとして楽譜に記すことは、作った曲を正確に再現し、相手に伝えることができる良い方法である。また、聞き合いの活動を助け、よりよい作品にしあげる上で大切な手だてである。

5 成果と課題

聞き合いのための四つの手だてを考え実践を行った。それぞれの成果と課題について述べる。

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

子どもが音や音楽を聞いたときの感じやイメージを音楽的要素に結び付ける場を持ち、表現や考えを聞き合うことで、要素のよさや楽しさを意識した表現が明確になった。次の表現の手がかりを共有するための聞き合いに有効に働いたと言える。

課題は、私たち教師が、子どもの発言がどの音楽を形づくっている要素なのかを瞬時に判断できるようになることである。また、音楽的語彙を子どもにどの程度理解させ、定着させていくかについても考えなくてはならない。

(2) 学習の過程を自覚させる

子どもに課題や目標を設定させることは、自分たちが学んだことを実感し、次のステップに進む上で大切な手だてであった。次の課題に迫るための観点を交流し、互いのよさを学ぶ聞き合いの活動への手だてとして有効に働いたと言える。

また、子どもの学習目標と題材そのものの目標に、差異が生じた場合の対処の仕方をおく必要がある。

(3) 音や音楽を聴き比べる

音楽そのものや表現のよさ・特性を実感する上で、また表現への具体的な技能を確認する上で大切な手だてであった。聴き比べる活動は、感想が広がると同時に特徴を見つけやすくする効果が期待できる。多くの意見を聞き合う機会となる。

この手だては、比較する視点を明確にすることが大切である。子どもには悪いところではなく、良いところを見つけることが大切だと理解させたい。

(4) テキストを活用する

瞬時に消えてしまう音楽を、聞き合いの媒体として有効に機能させるには、テキストを活用し可視化することが重要であることがわかった。

そのためには、記譜能力、音楽を形づくっている要素に関わる語彙力、聴取能力などの発達段階に応じた指導がなされなければならない。同時に、分析的に音楽をとらえるより、音楽の美しさ、楽しさを感じとることが何より大切であると学ばせることが大きな課題である。